

おおなぐら

大名倉遺跡(範囲確認調査)

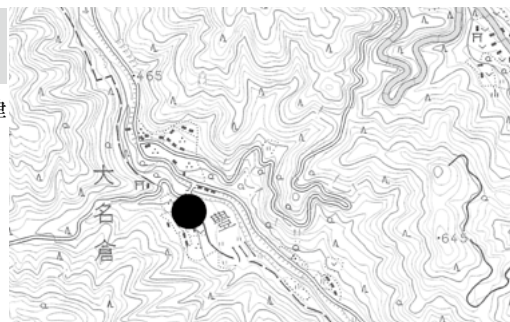
所在地 北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ上、滝ノ下、下谷、南貝津
(北緯35度06分45秒 東経137度34分01秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年10月～11月

調査面積 156㎡

担当者 酒井俊彦・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財範囲確認調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成28年10～11月に行った。範囲確認調査は、平成19・20・25～27年度にも行われている。また昭和43年(1968)には、早稲田大学にガトレンチによる発掘調査を行ない、縄文時代後・晩期の土器が多く出土している。

立地と環境 大名倉遺跡は豊川(寒狭川)の右岸に位置する。山地の狭い溪谷を流れてきた豊川の両側が大きく開ける地点にあたる。本遺跡の立地する右岸は2～3段の河岸段丘が形成され、対する左岸には西地・東地遺跡が所在する。本遺跡の標高は428～468mである。

調査の概要 調査は1m×2mのトレンチを78か所を設定して調査を行った。調査対象地は大きく3つ別れており、遺跡北部の茶畑などの耕作地エリア、遺跡西部の斜面地にかかる山林・竹林エリア、遺跡南部の耕作地エリアである。

遺跡北部エリアは標高449～458mの緩斜面である。TT001～011では礫の多い堆積層で顕著な遺構・遺物はなかった。ところがTT012で手のひらほどの大きさで縄文時代早期の押型文土器が出土したのを皮切りに、そこから下位のトレンチ(TT015・017・020・023・025)で、礫の混じりが少なく厚い黒色シルトの堆積層が確認され、縄文土器や打製石斧が出土した。縄文時代中期以降の遺物包含層と考えられる。特にTT025は道路脇の耕作地内で削平と攪乱が著しかったものの、縄文時代中期後葉の土器片がまとまって出土した。状況からみて土器埋設遺構と推定され、おそらく当該期の竪穴建物の床面付近が残存していたものと思われる。興味深い点としては、道路を挟んだ北東側で行われた早稲田大学の調査地点とは土器の時期が大きく異なっていることである。現況では見えにくくなっているが、この辺りで段丘と斜面地に区分されると思われる。

遺跡西部エリアは、標高458～468mの宅地跡とその周辺の平場にトレンチを設定した。宅地跡に相当するTT030～036で、近世の陶器が出土している。ただし遺構には伴わないことから、近世後半以降に進められた開墾によって混入したものと考えられる。

遺跡南部エリアは、標高443～452mの緩斜面で草地となっている。しかしTT037～078では耕作土・表土が50cm前後ありその下で黄褐色土の基盤層がある。この状況から、ほぼ全体に耕作地化で削平を受けているとみられる。顕著な遺物の出土はなかった。

以上にみる今年度の調査成果に加えて昨年度までの調査成果を加味して検討すると、遺跡の中心は早稲田大学の調査地点である。ここは上位の段丘面北端に位置し、そこから北西方向へ上る緩斜面では縄文早期・中期などの遺構・遺物が、標高約453m付近まで分布している。一方遺跡南部は、TT039・043から北側に東西方向の谷地形がみられ、実質的にはこの谷地形が遺跡の南限になっている可能性が高いと考えられる。

(永井邦仁)



調査風景 (TT020～025付近、南西から)



TT025 (左隅に土器埋設遺構、北西から)



大名倉遺跡の調査成果 (S=1/2,000)